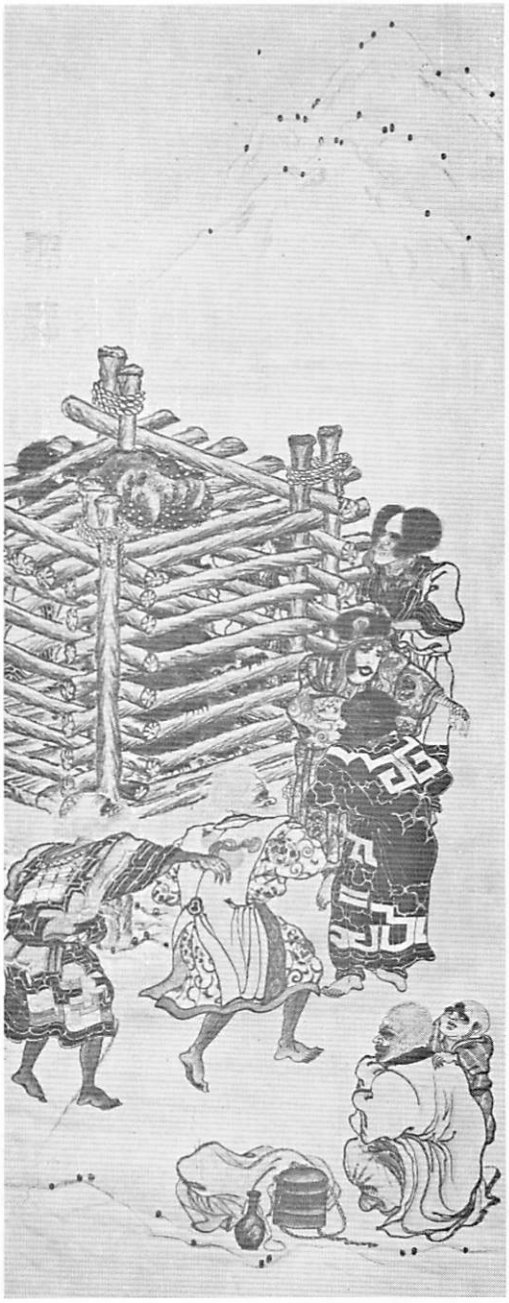
SARANIP No. 9

市立函館博物館館報 1973. 12.1



函館市指定有形文化財

アイヌ風俗12ヵ月屏風
十二月熊檻の周囲を輪舞する図

平沢屏山筆

12月になるとアイヌ達は「熊送り」を行なう。この絵はその模様を描いたもので、神の国へ還る仔熊をなぐさめるため檻の周囲を歌いながら踊っている図である。傍でその熊を育てた老婆が淋しげにしている。

この熊祭の風習はアイヌばかりではなく、同じ狩猟民族であるギリヤーク、オロッコ、カムチャダール、アメリカインデアンなどにも見られ、本州中部以北にもこの儀式が存在した。多くの動物の中で熊だけが特別扱いにされている点がおもしろい。

研究と資料

錦絵に見た人見勝太郎の事蹟

このたび錦絵〝函館五稜郭奮戦之図（3枚綴・右田年英筆）〟を会場に展示のため、写真に拡大したが、その描写力の確かさに驚いた。

戊辰戦争を題材にした錦絵は、美術的価値は極めて低いといわれるが、史実にもとずいて、繊細に描写された戦闘の情景は、真に迫るものがある。大胆な構図の中に、脱走軍総裁榎本釜次郎、副総裁松平太郎の両名が馬上より、七重浜の短兵決戦を督戦中の姿がクローズアップされている。3枚目に点景的に小さく描かれた図の中に、旗指物を背に官兵と奮戦の人物は、遊撃隊々長人見勝太郎を描いたものであることに、初めて気がついた。そうすると、この槍を振って、これに馳せ向っているのが、さしずめ長州藩の整武隊を率いた品川弥二郎であろうか。

そこで今、この興味ある場面に焦点を合わせ、人見勝太郎という知られざる人物の、波瀾万丈の生涯について、スケッチを試みることにしたい。

彼の経歴は、天保14年9月10日、二条城西十軒屋敷で出生、父の名は勝之烝、儒学をもって名をなし、京都文武場文学教授を勤めたといわれる。

慶応3年12月、彼は講武所の華といわれた遊撃隊士に抜擢され、将軍慶喜の身辺警護のため二条城に勤仕したが、幾ばくもなく、鳥羽伏見の戦が始まり敗走した。

のち江戸で伊庭八郎等の抗戦論者と企り、榎本艦隊と提携して、伊豆に渡って官軍の大動脈を遮断して、関東の官軍を孤立させ、仙台、会津その他、旧幕脱走の諸隊を糾合し、官軍のせん滅を計画、請西藩主林忠崇（ただたか）の賛同をえて、一時は箱根の関門を占拠支配する等多くの曲折を重ねたが、兵力の不足と、小田原藩の背叛（せざい）により敗走し奥州小名浜に上陸、仙台に出で漸く榎本の率いる艦隊に乗込み蝦夷地鷲の木に上陸したのは10月20日であった。

榎本はまず、箱館府知事清水谷公考に、この地上陸の趣旨を述べ、蝦夷地開拓を新政府に嘆願する和平の使者を送ることになった。

その先発を命ぜられたのが、この人見勝太郎(25歳)で、30余名の兵を引き連れ五稜郭へ向った。

この夜、脱走軍上陸の報に驚いた箱館府もまた、即時、在住隊を進撃させたので、峠下村において両者は衝突し、榎本の書翰を提出する暇もなく、ここに蝦夷地における戦争の火蓋は切られた。急を聞いた大鳥圭介は、部隊を引き連れ救援に駆けつけた。遊撃隊副長大岡幸次郎ら多くの犠牲者を出しながらも、決死的な抜刀奮迅に、戦は一方的な勝利となり、25日清水谷以下箱館在住隊は、青森へ退却した。

五稜郭に入った彼は、引き続き松前攻撃にも参加し、これを降した。

12月15日、蝦夷地を平定した脱走軍は、百一発の祝砲を放ち、合衆国の法制に倣って、選挙により役職を決定、人見は松前奉行に任命された。

その頃、新政府は蝦夷地進攻基本作戦を着々と進め、明治2年4月、江差の北方13kmの乙部海岸に上陸した官軍は、破竹の勢いで江差・松前を奪還し、海陸より大挙して箱館に迫り、戦は早くも終局を迎えたかに見えた。

その前夜、脱走軍の将兵一同は、箱館の遊廓築島の武蔵野楼で、訣別の大宴会を催した。いよいよ明日は最後の奮闘をなし、この地に骨を埋めんと固く誓い合い、心ゆくまで飲食し、江戸以来の労苦を、ひと時の宴に打ち忘れ、大いに歓談し合ったといわれる。宴酣にして、各部署についたが、この時、彼はやおら胴巻の白羽二重を裂いて、

幾万奸兵海陸来。孤軍防戦骸成堆。

百籌遂尽至ニ今日一。好作ニ五稜郭下苔一。

と辞世の句を認め、その横に遊撃隊長人見勝太郎と書き添え、これを指揮旗として出陣に臨んだ。

5月11日払暁2時、官軍は海陸より総攻撃を開始、七重浜に集合の陸兵は、官艦甲鉄・春日・陽春・朝陽等の協同援護の下に進撃した。これに対し遊撃隊等も、一本木の関門から撃って出で、七重浜付近で、官兵との間に熾烈な砲撃戦を展開、「砲声天地に轟き硝煙海陸に満つ」とあるが、この錦絵は、その光景を忠実に描いたものであろう。この戦いで彼もまた、艦上よりの砲撃に面部に重創を負ったが、従僕の久次なるものに助けられ、箱館病院で、高松凌雲の治療を受け、九死に一生を得た。

かくして5月18日、ついに五稜郭は開城し、全治した人見は8月、東京の糺問所へ護送された。

兵部省よりの達しには、「其方儀函根（ママ）ニ於テ官軍ニ抗シ中井範五郎ヲ殺害シ奥羽ニ逃レテ後榎本釜次郎等ノ賊ト共ニ函館ニ到リ官軍ニ抗シ力尽キテ降伏スト雖モ天地不可容ノ重罪数科ニ可被拠出格非常之寛典ヲ以テ香春藩エ長預申渡」とあった。

七重浜の戦いに散逸した血染の指揮旗は、品川弥二郎の手に拾われ、これを遺族に渡すため持ち帰った。明治9年ドイツ遊学より帰朝した品川は、すでに戦死したものと思っ

ていた人見が〝寧〟と名を改め、内務官僚として活躍していることを知り、互にその奇遇と無事を祝しあった。その時、遺族を探す暇もなく、筐底に秘していた旗は、改めて人見に記念として贈られたので、今日まで残されたのである。大きさは縦横50cm程度のもので、左側に血痕が見られるという。この時の漢詩を後に人見が揮毫したものと、当時の魯国ニコライ館（函館）において撮影した写真等が、五稜郭分館に保存されている。

人見が、西郷隆盛を暗殺しようと、勝海舟の添状を懐に面会を求めて云々とあるのは、明治3年6月、彼が釈放されて後、私学校設立を計画し、西郷の教示を受けるため、鹿児島に行った時の話が、誤伝されたものであろう。

明治13年茨城県令に進み、生涯の大事業として取組んだ利根運河開通に至る迄の経過は、ここでは省略する。

（五稜郭分館庶務係長：西田祐一）

市立函館博物館沿革史（その5）

＜開拓使東京出張所内仮博物場＞ (4)

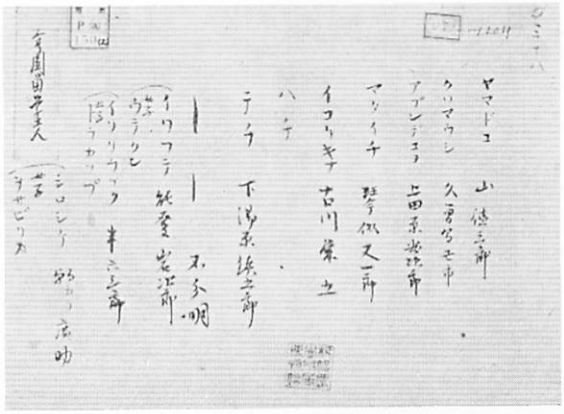
100年前のアイヌの写真

この写真は道新の渋谷氏より贈られたものである。

年代は明治5年5月、場所は東京芝公園内開拓使東京出張所構内。写された人物は同年5月11日、札幌を出発、函館より米国船に乗り、5月21日横浜着翌22日汽車で東京入りをしたアイヌ人の一行。この一行については当時の東京新聞が「アイヌ土人の東京文明見物」「アイヌ人の東京遊学」「素直なアイヌ人、江戸児を田舎者と見る」等の標題を掲げて、大きく報道している。「また大正10年には阿部正巳氏（第一次北海道史編集員）が「北海道開拓使及び三県時代のアイヌ教育」と題した論文を雑誌「歴史地理」に3回に分けて詳細に発表している。

この写真の裏面には墨で写真の人物の名前が書かれているので、前記阿部氏の論文記載の名前と対比すると、次のようになる。

（写真裏面）



（写真右から）

番号	男女別	アイヌ名	日本名	阿部氏の日本名	服装	年令
1	女子	ヲサビリカ	――	うの	アツシ着用	17歳
2	男子	シロシケ	○カラ広助	麻殼広助	洋服	21
3	女子	トラカップ	――	とら	アツシ着用	17
4	男子	イソリウック	半六三郎	半野六三郎	洋服着用	21
5	女子	ウテクヒ	――	もん	アツシ	17
6	男子	イワフテ	能登岩次郎	能登岩太郎	洋服	24
7	男子	不明	――	田山次郎	洋服	32
8	男子	――	――	佐野雷次	和服	21
9	男子	テチ	下湯原鉄五郎	夕張鉄五郎	アツシ	34
10	男子	ハチ	――	石井八之助	――	23
11	男子	イコリキナ	古川栄五	古川伊吾	アツシ	34
12	男子	マタイチ	琴似又一郎	琴似又一	洋服	32
13	男子	アプンデコ	上田原安次郎	夕張安五郎	サシコ	38
14	男子	クツマウシ	久留間仁市	木枯水七	洋服	35
15	男子	ヤマドコ	山徳三郎	矢間徳二郎	洋服	23

※10 ハチこと、石井八之助は石狩郡のアイヌで他14人は札幌郡のアイヌである。

入　館　者　統　計

昭和48年度常設展示（48.6.1～48.10.31）

月別	区分	本館 個人	本館 団体	本館 計	分館 個人	分館 団体	分館 計	郷土資料館 個人	郷土資料館 団体	郷土資料館 計	総計
6	大人	351	272	623	10,362	4,484	14,846	314	4	318	15,787
	小人	177	6,179	6,356	3,234	2,158	5,392	78	166	244	11,992
	計	528	6,451	6,979	13,596	6,642	20,238	392	170	562	27,779
7	大人	1,174	342	1,516	14,043	4,409	18,452	359	8	367	20,335
	小人	482	1,149	1,631	1,167	391	1,558	213	0	213	3,402
	計	1,656	1,491	3,147	15,210	4,800	20,010	572	8	580	23,737
8	大人	2,096	0	2,096	22,233	2,234	24,467	532	39	571	27,134
	小人	873	0	873	3,061	213	3,274	484	137	621	4,768
	計	2,969	0	2,969	25,294	2,447	27,741	1,016	176	1,192	31,902
9	大人	837	379	1,216	8,615	1,641	10,256	254	17	271	11,743
	小人	395	627	1,022	653	972	1,625	172	0	172	2,819
	計	1,232	1,006	2,238	9,268	2,613	11,881	426	17	443	14,562
10	大人	191	50	241	2,418	335	2,753	130	5	135	3,129
	小人	39	24	63	152	42	194	57	60	117	374
	計	230	74	304	2,570	377	2,947	187	65	252	3,503
累計		8,016	9,038	17,054	83,003	21,096	104,099	3,306	449	3,755	124,908

博物館日誌抄　（48.6.1～48.9.30）

48. 6. 1　岩村町郷土館職員（東京都在住）松平来昌氏館内見学（資料館）
2　市民講座（生態）開催、講師千葉蘭児氏(本館)
2　科学教室（天体）開催、講師津川軍次郎氏（分館）
8　北海道開拓記念館主催「屯田兵展」に資料貸出（分館）
9　青函文化交流団一行が館内見学（本館）
10　市民講座（考古）開催、講師金田功氏（本館）
10　特別展陳列資料受領のため札幌市在住の北尾義一氏来館（本館）
11　特別展終了のため資料陳列替えで休館、15日まで（本館）
16　科学教室（植物）開催、講師宗像和彦氏(分館)
17　宗偏流虚心会主催の茶会が杉花亭にて開催（本館）
17　網走市教育委員会小林氏来館（本館）
17　市民講座（歴史）箱館戦争(1)、講師西田係長
17　科学教室（植物）湯の川の熱帯植物園見学、講師宗像和彦氏（分館）
19　北海道文化財保護協会副会長越崎宗一氏来館（本館、資料館）
20　道立西高等学校生徒166名来館見学（資料館）
24　科学教室（こん虫）開催、講師中島康二、国兼正明の両氏（分館）
24　青年センター茶会が杉花亭にて開催（本館）
24　北海信用金庫職員一行15名（小樽）が館内見学（本館）
28　北海道博物館大会が稚内市で開催石川館長、柴田学芸員出席
29　全道図書館長会議に参加の一行６名が館内見学（本館）分館見学は20名
29　中華民国（台湾）の視察団一行20名館内見学（本館）
7. 3　福島県いわき市議会議員一行７名来館（本館、資料館）
6　北海道教育庁文化課新美術館建設準備室長倉田公裕氏他１名来館（本館）
7　市民講座（生態）開催、講師宗像英雄氏、石川館長（本館）
7　科学教室(天体)開催、講師津川軍次郎氏(分館)
8　市民講座（考古）開催、講師金田功氏、千代主任（本館）
11　松前町史編集室長榎森進氏来館（本館）
12　青函文化交流団一行45名館内見学（本館）
12　札幌大谷短大小谷博貞氏（画家）館内見学（資料館）
15　函館市内半田機械社員一行23名館内見学（資料館）
15　江戸千家流不白会主催の茶会が杉花亭にて開催（本館）
15　市民講座（歴史）開催、箱館戦争（２）講師西田係長（分館）
17　名古屋市教委文化課太田学芸員来館
20　所沢市議会議員一行８名視察のため来館（本館・資料館）
22　市民講座（民俗）開催、アリュートの皮舟について、講師姫野係長（本館）
28　科学教室（こん虫）開催、講師国兼正明氏（滝沢町）
29　友の会主催の講演会開催「アジアの博物館と市民生活」講師直江広治氏（本館）
8. 1　港まつり協賛「郷土資料展」開催、８月15日まで（資料館）
4　人見、宮前、港各町の児童館児童106名館内見学（資料館）
4　市民講座（生態）開催、講師寺地潔氏、石川館長（木古内町釜谷）
7　科学教室（こん虫）開催、講師国兼正明氏中島康二氏（森町字赤井川）
7　中空知教育会一行12名館内見学（本館）
7　北海道博物館協会役員会が札幌市定山溪にて開催、石川館長出張
8　科学教室（植物）開催、講師宗像和彦氏（五稜郭公園付近）
10　北大水産学部研究生ジョン・ドイル氏他１名来館（本館）
10　科学教室（天体）開催、講師津川軍次郎氏（分館）
11　小樽市博物館竹田学芸員来館（本館）
14　科学教室（植物）開催、講師宗像和彦氏、中島康二氏（分館）
16　陸奥湾海洋調査のため石川館長が青森市浅虫に出張
17　箱館戦争関連台場調査（二股、川汲その他）
26　市民講座（美術）開催、講師武内収太氏(本館)

―あとがき―

※昭和48年度はサラニップを３回刊行しました。９号は今年度最終号になります。

※６号から続けてきました資料紹介「アイヌ風俗12カ月屏風」は今回で終了します。解説は主に「アイヌ絵志（越崎宗一著）」を参考にしました。　＜岡田＞

Hakodate City Museum News
SARANIP―サラニップ― No. 9　1973.12.1.発行
編集・発行　市立函館博物館（TEL 0138-23-5480）
北海道函館市青柳町・函館公園内（〒040）